

今回は、11月5日に行われました口腔顔面痛診断実習セミナーについて日本歯科大学の原 節宏先生に、報告していただきます。

口腔顔面痛診断実習セミナー参加報告

日本歯科大学附属病院 総合診療科 顎関節症診療センター 原 節宏

季節外れの台風に翻弄された10月も過ぎ、11月になってすっかり秋の気配につつまれた平成29年11月5日(日)、東京・信濃町の慶應義塾大学病院2号館11階大会議室にて、本年度の口腔顔面痛診断実習セミナーが開催された。会場には、雲一つない秋空のもとに24名の受講者が参集し、冒頭、企画運営委員長の村岡 渡講師(川崎市立井田病院口腔外科)より本セミナーのプログラムの解説のあと、サマーキャンプを含めた各種セミナーの内容説明があり、年間スケジュールによってスキルアップができる研修システムについて紹介があった。



村岡講師



会場風景

午前には、A~D班の1班6名、4グループに分かれ、各グループの担当講師の紹介の後、受講者の理解レベルを確認するためのプレテストを行った。プレテストでは非歯原性歯痛、臨床診断推論、疼痛構造化問診、筋・筋膜性疼痛、DC/TMDに準じた筋触診法、神経障害性疼痛、脳神経診査法など多岐にわたった項目から出題され、特に初心者にとっては受講前の実力を確認するよい機会となった。



和嶋講師

午前の部の最初は、和嶋浩一講師(慶應義塾大学医学部歯科口腔外科学教室)から臨床診断推論の意義と進め方について、基本となる診断ステップのとらえ方と注意点を非歯原性歯痛の診断手順などの実例を交えながら解説があった。

続いて、村岡講師より、1症例目の臨床診断推論実習症例として歯痛および顔面痛の症例が提示された。ここでは症例を提示するのみにとどめ、診断の推論作業を行う前に、臨床上遭遇する可能性が高い筋・筋膜性疼痛および

筋・筋膜性歯痛の総論と筋触診による診断手順について、原 節宏講師(日本



デモを行う原講師



筋触診の相互実習

歯科大学附属病院顎関節症診療センター)から解説があり、続いてグループごとに各インストラクターの指導のもと、筋圧痛計による触診圧の標準化を伴った筋触診による診断方法を受講者相互に経験した。原因不明とされる歯痛の多くが咀嚼筋の刺激による関連痛として生じる筋・筋膜性歯痛の体験実習においては、筋触診の刺激の量と時間をコントロールすることで、多くの受講生が歯列部に関連痛を体験することができた様子で、「関連痛の誘発の体験は初めて!」と、満足げに語ってくれた受講生が印象的だった。



臨床診断推論実習

午前同様の最後に行われた1つ目の症例に対する臨床診断推論実習では、受講生からグループごとに進行役・発表役・書記役を最初にきめてもらい、進行役のリードで包括的病歴聴取から鑑別診断を挙げた。さらに、鑑別診断に対する確認作業として、先ほど経験した実習内容を参考にしながら、行っている検査の結果や追加の問診などをインストラクターに質問し、必要なデータをインストラクターから提示するというワークショップ形式で行われた。その後、診断の見直し作業、最終診断という流れで診断を確定していった。発表役の受講生からは、各グループ内でのような討議を行っていったかを簡単に解説し、最終診断名を提示していただいた。最後に村岡講師から、当症例における臨床診断推論のすすめ方について詳しい解説があり、問診と臨床検査を注意深く解析していくことが重要である点を確認した。



受講生による診断の発表



デモを行う大久保講師

午後最初の最初は、引き続き村岡講師から2症例目の臨床診断推論実習症例として歯・歯肉・頬部の疼痛を主訴とした症例が提示された。ここでもすぐに推論に入るのではなく、症例を提示するのみにとどめ、除外診断に簡便かつ有用であるものの歯学教育では十分に組み込まれていない12脳神経の診査法の実際について、大久保昌和講師（日本大学松戸歯学部有床義歯補綴学講座）から解説があった。その後、「すぐできる12脳神経の診査法の実際」というタイトルで大久保講師のデモンストレーションが行われ、それにならって受講者が脳神経の異常の有無についてインストラクターの細かい指導のもと、実際に相互に実習を行った。



聴覚に関する12脳神経の診査風景



デモを行う今村講師

続いて、今村佳樹講師（日本大学歯学部口腔診断学講座）より「知覚検査の結果の解釈 何がわかるか」というタイトルで、神経障害性疼痛に関連したチェアサイドで行うことができるスクリーニング検査や、診断のための定性感覚検査および定量感覚検査についての解説の後、綿棒・つまようじ・温水・冷却パックなどの身近な材料を利用した定性感覚検査を、インストラクターの指導のもと相互実習で体験していただいた。



綿棒を利用した定性感覚検査の実習風景



臨床診断推論の結果発表

午前同様、2回目の臨床診断推論実習では問診内容から考えられる診断名を挙げ、追加の情報、本日経験した各実習とその解説を参考にしながら最終診断を決定するという流れで行われた。各グループの発表の後に、村岡講師から当症例における臨床診断推論についての詳説があり、グループにおける討議内容の改善点などを確認した。

セミナーの最後は、質疑応答と総合ディスカッション、その後はポストテストを行い、本セミナー受講後の参加者の理解度を再チェックした。多くの受講者が、プレテストで答えが出せなかった問題がポストテストでは正解を選んでいることを確認していた。また、事後アンケートを記入していただき、今後のセミナーの運営に大いに役立つ貴重なご意見をいただくことができた。



理解度テストを採点中の講師陣

今回のセミナーは中級レベルに相当するセミナーであるが、初級に相当する口腔顔面痛ベーシックセミナー（6月11日に開催）を受講していなくても参加していただけるように、講義も総論を交えた充実した内容になっている点が特徴といえる。また、インストラクターも口腔顔面痛に精通した講師陣から構成されており、初めての参加者にとっても、多くの実習が組み込まれた本セミナーを経験することにより、他では学ぶことが難しい知識とスキルを、明日からの日常臨床に役立てていただけるものと期待している。本セミナーは毎年1回行われる予定となっている。

日本口腔顔面痛学会 News Letter へのお問い合わせは

「日本口腔顔面痛学会事務局」まで

〒135-0033 東京都江東区深川 2-4-11 一ツ橋印刷株式会社学会事務センター内

TEL: 03-5620-1953, FAX: 03-5620-1960 E-mail: jsop-service@onebridge.co.jp